国立大学法人富山大学次期学長候補者選考について

[選考経過]

国立大学法人富山大学学長選考・監察会議は、令和８年６月 24 日「国立大学法人富山大学学長候補者の選考の基準」及び「国立大学法人富山大学にふさわしい学長像」の公示により、学長候補適任者の推薦を求め、９月 14 日（月）開催の会議において、推薦のあった北島 勲 氏、酒井 秀紀 氏、関根 道和 氏、林 篤志 氏、堀田 裕弘 氏の５氏を学長候補適任者に決定した。

続いて、10 月 16、19、21 日に杉谷・五福・高岡の３キャンパスにおいて５氏による公開討論会を実施し、10 月 26 日から 30 日にかけて、学内意向調査を実施した。

本日（11 月４日（水））会議を開催し、学長候補適任者に対する面接を実施した上で、富山大学にふさわしい次期学長候補者について審議を行った。審議に当たっては、推薦時の提出書類（履歴、所信等）、公開討論会、意向調査の結果等を参考に、「国立大学法人富山大学学長候補者の選考の基準」及び「国立大学法人富山大学にふさわしい学長像」に照らして、総合的に判断を行った。

これによる次期学長候補者選考の理由は以下の通りである。

[選考の経緯と理由]

人類の持続的な発展が問われる中で、国際情勢の不安定化で世界は分断し、わが国においては人口減少と地方の衰退、経済やエネルギー問題が深刻である。国立大学は、不確実な社会を切り開く世界最高水準の研究の展開とイノベーションの牽引、変化する社会ニーズに応じた高度人材の育成、地域社会を先導する人材の育成と地域産業の振興の実現と貢献が求められている。

富山大学は、芸術文化学部を含む９つの学部と約１万人の学生を擁する、日本海側にあるわが国の基幹大学の１つである。高等教育および地方創生を先導し、北陸から東アジア、さらには世界に展開する知のゲートウェイとしての役割が期待される。

３大学統合から 20 年を超える歳月の中で学内融和と連携が進んできた。教養教育の一元化と都市デザイン学部の創設に続き、データサイエンス教育の全学導入、学士課程と大学院課程の整備が行われ、社会のニーズに応える改革を行ってきた。しかしながら、18 歳人口の減少等、大学を取り巻く環境は極めて厳しく大学改革は不断である。

次期学長の役割は、地域から世界に展開する強みと特色のある大学を目指すべく、大学の機能の最大化に向けたリーダーシップの発揮である。それは、総合大学としての多様な専門分野の特性を活かした、教学運営と法人経営の両立に他ならない。さらに、社会の大きな変化を汲み取り、問題解決に向けて果敢に取り組む大学ガバナンスであろう。

学長選考・監察会議は、以上のような考え方で、次期学長候補者の選考を進め、人格・識見・責任感や教育・研究・社会貢献に対する実績と情熱に加えて、企画構想力、課題解決や改革に向けた実行力、さらには法人経営に係る知見を問うたところである。

６月に始まる一連の作業は公示等の情報開示をもって進められ、３日間にわたる３会場での公開討論会の開催は、学内構成員の意向調査への参加を促し、大学運営に対する意識の共有化が図られたところである。

本日の学長選考・監察会議においては、各候補適任者の面接の後、ふさわしい学長像の内容を踏まえ、意向調査の結果を参考にした上で、５名の学長候補適任者の中で特に高く評価できる候補者という観点で議論を進めた。その後、学長選考・監察会議委員の総意において、酒井秀紀氏が学長候補者として適任であると決定した。学長選考・監察会議は、以上のプロセスと考え方で学長候補者の選考を進めた。

富山大学が直面する厳しい状況を乗り越えるにはこれまでの改革を実証路線に乗せつつも、なお多面的な改革が求められる。酒井秀紀氏の所信は、学長任期の再任期間を含めた６年間のロードマップを示し、中期目標中期計画期間との関連性への意識づけと具体性のある内容である。特に、所信に示された３つのＷａ（和・環・話）を実現し、大学改革を進めていくことに関して最も高い評価を得たことから、酒井秀紀氏が適任であると判断した。学内構成員との対話を重視した強いリーダーシップを発揮し、大学運営を進めていくことが期待される。

酒井秀紀氏には次の４年間において将来を見据え富山大学のあるべき姿を示して構成員とともに改革を進められることを期待したい。

先行きが不透明で混沌とした時代にあって、国立大学法人富山大学が一層発展することを確信し、地域社会をはじめとするすべてのステークホルダーの皆様に、次期学長候補者の決定をここに報告する。

令和８年１１月４日

国立大学法人富山大学学長選考・監察会議